

池内 紀著『山の本棚』

山岳書紹介のエンサイクロペディアとしてはちょっとユニークな本である。本書の書名から期待して購入するとまずは目次をただでガッカリさせられるのがオチではあるまいか。

というのは、紹介されている本は150冊に及ぶが、山岳書の名著、古典などと世に謳われた著名な書籍は全く取り上げられていない。所謂山岳書としては、僅かに高頭式編『日本山嶽誌』、ウェストン著『日本アルプスの登山と探検』、新田次郎著『強力伝』、辻まこと著『山の声』、上田哲農著『きのうの山 きょうの山』、畦地梅太郎他編『山のABC』、の6冊が取り上げられているだけである。

紹介されているその他の本は“山と人”、“自然と人”などのキーワードでは共通項はあるものの、凡そ山岳書とは言えないような本ばかりである。例えば、松浦武四郎『知床紀行集』や柳田國男『山の人生』、中尾佐助『照葉樹林文化論』、深沢七郎『檜山節考』などが採録されているのは未だしも、例えば、ダーウィン『種の起源』、井上靖『補陀落渡海記』、小沢昭一『日本の放浪芸』、開高健『戦場の博物誌』、きだみのる『気違い部落周遊紀行』などが出てくるに至っては、“これは一体何じゃいナ”と投げ出したくなるような本もあった。

しかし、僅かな年金で何とか食い繋いでいる貧乏人の私にとっては、野口英世の大枚2枚を叩いて買った本だから、本の髄までしゃぶり取らないことには勿体無いと一旦投げ出した本を未練たらしく拾い上げてパラパラと斜め読みしていく内に、これはタダモノではないと引き込まれてしまったという次第である。

パラパラと捲ると、取り上げられている本の殆どは読んだことも見たこともないような（大半はマイナーな?!）本であるが、興味深々アマゾンの古本市場を探し回る羽目になった。

ご高尚のとおり、この本の著者の本職はドイツ文学者であるが、アウトドアやエッセイの世界でも名が知られ、その本質を逃さない論とユーモアと諧謔が効いた筆致には独特の味があると好評を博しているセンセイでもある。その著者が蘊蓄を傾けて12年間に亘って雑誌『山と溪谷』の読書欄「山の本棚」に連載してきたエッセイ153編を著者の急逝後今回そのまま単行本にしたものが本書であるので、山好きの皆さんはきっと何篇かはお読みになっているのではないかと思います。私もこの著者のエッセイは気に入っているもので今までに出版された著書は大体は読んだ。

この『山と溪谷』連載の「山の本棚」は、一応は書評という形は採っているが、単なる書評ではなく、“書評”に名を借りた書林散策のエッセイである。腰巻評論にも書かれているが、古今東西、山、人、自然、民族、民俗、神様仏さま等に関する書林の森を放浪しつつ弾き出した著者独特のアンソロジーであろう。一編一編は僅か2~3ページの短いエッセイであるが、“これは原典を探し出して読まねばならぬ”と思わせる魔力が潜んでいる。文中に挿入されている挿絵も味がある（一例上記）。

残念ながら、著者は「山の本棚」を連載中の2019年8月、78歳で急逝された。それ故、本書には「はじめに」や「あとがき」などの著者の自己紹介めいた駄文は一切入っていない。これまた結構。騙されたと思ってご一読を。

山と溪谷社 2023年7月刊 1,980円

(2023年9月記)

